



## 親子で考える “ヒロシマ”の歴史と今



### 平和行動 広島親子派遣団



親子がともに平和を学ぶ場として、5月4日～6日の日程で「広島親子派遣団」が実施され、7産別から9家族22名が参加する中で、世界で初めて原爆が投下された“ヒロシマ”の歴史と今を学びました。

#### 「なんで鶴なの？」

1日目は高崎を出発し約6時間で広島に到着。宿舎に荷物を置き徒歩で「平和記念公園」に移動し、はじめに原爆死没者の名簿が納められた『原爆慰霊碑』前で慰霊を行いました。次に2歳の時に被爆し白血病で亡くなった「佐々木禎子さん」の平和への思いを受け造られた『原爆の子の像』に、組合員と家族が心を込めて作った折り鶴2万2千羽を献納しました。



子どもたちからは「なんで鶴なの？」とお父さんに質問があり、お父さんは「世界のみなが平和になりますようにお願いし、鶴を折るんだよ。」と答える一幕もありました。その後、原爆資料館などを見学しました。

#### 被爆も強いきずなで助けられる。

2日目は、はじめに昨年の連合群馬平和学習会で講師を務めた原爆被害者団体協議会理事長の坪井直さんから、原爆投下時の様子や核兵器廃絶に向けた国内外での活動などについて話を聞きました。坪井さんは8月6日爆心地から1.2kmの建物も少ない道端で被爆しました。



その後、自分も負傷していた同級生の強い励ましで4km先にあった治療所まで歩き続けたこと。また、行方を探し続けたお母さんが意識のない坪井さんを見つけ、長年の献身的な看病で一命を取り留めたことなどが話され、最後に「このような辛い経験も人の思いやりによって助けられました。自分のことばかりではなく、家族や他人の気持ちが分る人になってもらいたい。」と坪井さんの思いのこもった訴えがありました。

#### 語り継ぐ思い……

また、参加者のNTT労組の高橋篤さんから、お父さんが広島で被爆された話がありました。当時、お父さんは海軍の無線監査役として任務中に兵舎の中で被爆、直接的な被爆ではなかったものの、残留放射能で2次被爆し亡くなるまでの52年間は、あらゆる放射線後遺症に苦しんだといいます。奇しくもこの日はお父さんの9回目の命日であり、高橋さんは「父の苦しみや核兵器廃絶について、被爆家族として次代に語り継いでいきたい。」と話されました。



#### まだヒロシマに物語はある……

こうした話を聞く中で、私たちの知らないヒロシマがまだまだあると感じました。また、今回の親子派遣団が、大切な家族の命を奪った戦争を親子で考えるきっかけとなり、今後も家庭で平和学習を続けて欲しいと強く感じました。  
是非、皆さんも被爆地を一度訪れて下さい。

